広池千九郎と新渡戸稲造の交流関係

諏訪内　敬　司

目　　次

序.
1．きっかけ
2．『道徳科学の論文』序文を依頼
3．新渡戸と天理教
4．新渡戸の序文完成
5．『道徳科学の論文』の紹介
6．大講演会実現へ
7．国際紛争の中で

序

混迷した人類社会を救済すべく、『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』（以下『論文』と略す）を昭和3年（1928）に完成して最高道徳の普及に取り組んだ法学博士広池千九郎（1866～1938）にとり、新渡戸稲造（1862～1933）はモラロジー普及上大切な恩人の一人であった。それは第一に、広池が人類の幸福を願って書き上げ

た『論文』に新渡戸が序文を寄せて、同書の意義を世界史的視点から高く評価して推奨してくれたからである。第二には、広池がモラロジーを初めて日及すべく社会教育の第一歩として昭和6年（1931）9月21日に大阪毎日新聞本の社会に広く普社講堂で開催した大講演会に、広池を東方の光の一つであると紹介講演してモラロジーの普及に大きな力を貸してくれたからである。広池はモラロジー研究所設立を計画するにあたり、新渡戸を学術顧問の候補の一人にあげるなど、その後も新渡戸の深い学識と豊かな国際感覚に指導を仰ごうとした形跡もある。しかし、新渡戸は国際人として幅広い活動を展開しつづけ、広池もモラロジーの社会教育活動に多忙を極めたため、前記の象徴的な二項以後は表立った接触はなかったようで、新渡戸はその後昭和8年（1933）10月15日（日本時間16日）、カナダで客死して二人の交流は終止符を打つ。本稿は、現存する資料をもとに、両者の交流関係をわかる範囲で究明しようとするものである。

1．きっかけ

新渡戸稲造は札幌農学校教授、台湾総督府技師、京都帝国大学教授、第一高等学校長、東京帝国大学教授、東京女子大学長を経て国際連盟事務局次長に選ばれ、国際平和に尽力した。その後、帝国学士院会員、貴族院勅選議員となり、晩年は日中・日米関係の修復を願って精力的な活動を展開した。農学、経済学、国際政治、文学、宗教などを修めた幅広い学者であり、学校教育、社会教育にも貢献し、人間的にも優れ、かつ外国人と対等に交渉できる国際人であった。

二人が直接の交流をもつ以前から、広池は新渡戸という優れた人物に一目を置いている。それは、広池が自著『伊勢神宮』（明治41年—1908年）を、当時第一高等学校校長兼東京帝国大学教授であった新渡戸に贈呈しようとしたことに伺われる。新渡戸は日本道徳の源が武士道にあるとして明治32年（1899）、英文の『武士道—日本の魂』をアメリカで出版して世界的な反響

を呼び、一躍「世界のニトベ」として知られるようになった。同書は翌年日本でも出版され（英文）、明治38年（1905）には天覧に供され、その時の上表文が明治39年出版本に付されている。広池はこの上表文を読んで新渡戸の皇室に対する尊崇の念厚きを知って注目し、自著を贈呈しようという意志になったと思われる。同上表文は国民教育上多大の参考になるとして、広池は後に『道徳科学の論文』に全文を紹介している。広池は新渡戸に対し「卑著謹呈　つまらぬものに候えども『序論』の方は御高著『武士道』に縁故これあるものに付き御高覧くだされ度候。なお御指教を賜わらばありがたく候」と書いた名刺を残している。明治42年（1909）か同43年ごろのものと思われるが、これは控えの名刺で、別に贈呈著書に添付してわたしているか、また著書を贈呈しようとしてしなかったか定かではない。もし贈呈していれば、後に面会した時に話題としたはずである。

また、広池の残している新聞切り抜きの中に、新渡戸がキリスト教協同伝道演説会で行った講演「人生の勝敗」要旨がある。年月不祥だが、新渡戸が京都帝国大学法学部専任教授となった明治37年（1904）から一高校長を経て国際連盟事務局次長となる大正8年（1919）までの間と推定される。

昭和6年に大毎講堂で開催された「広池千九郎博士産業、経済講演会」において新渡戸は、広池の名前は10数年前からしばしば耳にしていたが、国際連盟の仕事で海外生活をしていたため、交わる機会がなかった、と述べている。[1] 広池は明治43年（1910）11月、東京帝国大学法科大学に学位請求論文を提出し、大正元年（1912）12月に法学博士の学位を受けた。新渡戸は明治42年（1909）から昭和2年（1927）まで同帝国大学法科大学教授を勤めているから、広池の学位授与の事を知っていたと思われる。また、広池は大正2年（1913）10月1日、東京・上野精養軒で開かれた帰一協会の例会に招かれ、「天理教の教理及実際に就きて」と題して講演している。新渡戸は帰一協会会員であったが、この例会には出席していなかった。しかし、広池の講演の全文が帰一協会会報第4号に載っているから、新渡戸が目を通した可能性がある。いずれにしろ、新渡戸の言葉から推定すると、広池が博士号を取得し

て社会的に一躍有名になった大正元年（1912）から、新渡戸が国際連盟に赴任する大正８年（1919）までの間に、新渡戸は広池の名前を知ったものと思われる。

２．『道徳科の論文』序文を依頼

その後広池は、天理教の信仰を深めて一時同教の本部に入るが、やがて離れて労働問題の道徳的解決に奔走するかたわら、大正15年（1926）に『モラル・サイエンスの論文』の謄写版を印刷、また、同書の英訳に取りかかる。英訳本を出版しようとしたのは、明治以来の日本では欧米文化の吸収に懸命で、日本のものよりも外国のものが尊重されていたので、新しい学問としてのモラロジーもまず欧米で広め、しかる後に日本に逆輸入した方が日本人に注目されると考えたからであると思われる。

広池は英訳書の出版について、国際的に権威のある学者に序文を書いてもらおうと、まず既知の間柄であり、我が国の東洋史学の開拓者で、ヨーロッパにまでその名前を轟かせていた白鳥庫吉博士（当時、東京帝国大学・学習院大学名誉教授）に昭和２年（1927）（月日不明）に面会して依頼し、もう一人学習院関係者で序文を書いてくれそうな候補者を求めたが、適当な名前があがらなかった。そこで広池は、このころ（同年３月）国際連盟から帰国した新渡戸博士はいかがだろうと言ったところ、白鳥博士も賛成して、ちょうど面会した日の午後「新渡戸博士に会うから話しておきましょう」ということになった[2]。このエピソードからも、広池は新渡戸に注目していたことが伺える。白鳥博士の紹介により、まず広池の弟子中田中が新渡戸を訪問し、広池のことをある程度話した模様である[3]。

こうして広池は新渡戸と面会の約束をとりつけ、昭和２年６月30日、新鹿沢温泉に行く途中、軽井沢の別荘に新渡戸を訪問している[4]。その時の模様は同席した中田によると、「そのときに会うなりあいさつなしで、新渡戸博士は、白鳥博士からだいたいの内容は聞かれたのでしょう、初対面のあいさ

つもそこそこに、あなたは実に偉いことをご研究なされました、とおっしゃった[5]」という。即ち、新渡戸は白鳥博士から『論文』のおおよその内容を聞いていたと思われる。新渡戸は、当時の世界は混乱期であり、すべてに標準がなく、西洋の道徳学者は案外程度が低いと述べている。そして、帰国前にベルギーの王室から依頼を受けて話しに行ったといって、その時話した内容のことを書いた雑誌が郵便で届いたので、すぐ広池に見せたという[6]。その記事はおそらく、発行日と内容から「道徳の国際化」（『実業之日本』昭和２年７月１日号[7]）と思われる。新渡戸はその記事で、世界各国間で道徳の標準化が進んでいるが、それを有効に働かせるためには親切心が根本であると述べたが、最高道徳にまでは気がつかず、広池の（最高道徳の）説には敬服した、といったという。こうして二人は学問や道徳について懇談し、最後に広池は『論文』をまず海外の著名な学者に紹介したいのでと[8]、序文を英文で書いて欲しいと依頼している。新渡戸はこれに対し、まず著書を読んでからという意向を示したため、１章２章など英訳章と日本文（緒言～13章）を渡したという[9]。なお、この席上、広池がモラロジーをまず海外に普及したいと述べたのに対し、新渡戸は「日本人の創建したこの偉大な学問を、日本人が知らずに外国人が先に知るとは残念なことです。日本で先にご発表なさってはいかがですか[10]」と進言したという。会談は約１時間半にわたった模様で、広池は午後４時に軽井沢の丸本旅館に帰って休憩した後、５時台の汽車で新鹿沢温泉に向かった[11]。

前記に続いて７月16日には『論文』14章１～９項を渡したという謄写版発送控えが残っているが、代理者か郵便にてよっであろう。その後しばらく接触がないようで、この間に新渡戸は渡された『論文』に目を通したと思われる。

その後しばらくして広池は、昭和２年11月21日に研究の資金援助者諸岡長蔵宛書簡の中で、月末から湯河原温泉に行くが、新渡戸博士に用事があるので12月20日ごろ一時帰京の予定、と動向を知らせている。翌昭和３年（1928）４月になると、熱海温泉に滞在中の広池は、東京の中田に対し、新渡戸に電

話して近々（26、７日ごろ）上京して面会したいと申し入れるよう手紙で指示している。その約束は恐らくとれなかったものと思われる。それは、５月７日付新渡戸宛書簡の写しに広池が「先日欠礼以来、御無沙汰仕候処」と書いた後、年来神経衰弱にかかっており、毎年４、５月ころには風邪にかかりやすく今年も発病している、と述べていることからも推定される。この手紙は更に、序文について使いをやるので宜しくと、序文の執筆を遠回しに催促している。そして、白鳥博士とは別の角度から、主として『論文』と世界平和との関係について叙述して頂きたいが、と伺いを立てている。また、初対面の時には当分日本文は印刷しないつもりであると述べたが、各方面からの求めにより日本文を印刷することにし、目下進行中で、英文は翌年に印刷すると伝えている。

その後、広池の『日記』に「昭和３年５月23日　晴天。午前11時より新渡戸博士に御面談のため御訪問。午後１時ソサイティに御帰着（他筆）」とあり、当時東京・渋谷にあったソサイティ（報恩協会）から文京区にあった新渡戸邸に広池が訪問していることがわかる。翌24日付新渡戸宛広池書簡の控えによれば、重ねて序文のお願いをした上、14章10項中追加予定の経済事項に関する文を同封し、更に、早計ながらと断り書きをして、究極の目的であるモラロジー大学の趣意書を見せている。広池はこのころから大学設立の計画を抱いており、それを新渡戸に打ち明けて意見を聞こうとしたのは、新渡戸に厚い信頼を置いていたからであると推察される。

３．新渡戸と天理教

ところが昭和３年７月になって、新渡戸が６月24～６日にかけて天理教本部を訪れ、視察と講演をしていることが、天理教機関雑誌『道之友』７月５日発行号に紹介される。新渡戸は『実業之日本』７月15日号に「天理教本部を視たる所感」を掲載している[12]。この記事を読んで新渡戸の天理教本部訪問を知った広池は７月21日付の中田宛書簡で、新渡戸に自分の手紙を持参させ

た上、天理教の感想を聞き、かつて自分が同本部の教育顧問と天理中学校長を２年間勤めて大正４年に本部を退いた事情と、『無量寿経』の話をするようにと指示している。『無量寿経』の話とは、恐らく『論文』５冊目に出ている内容であろうと推察される[13]。即ち、釈迦はバラモン教に入門したが、その教理の実行法に多くの弊害があり、人類全体を救済することができず、またバラモン教を実践しても不幸が大きくなることを看破して、仏教を発見した。しかし、バラモン教での６か年の苦行は仏教発見の予備修業としての位置付けがなされているとして、広池は自分の天理教での２年間を、モラロジー確立の予備修業として位置付けていることを伝えようとしたものであろう。

新渡戸が天理教に関心を示した直接のきっかけは、東京帝国大学時代の教え子であった鶴見裕輔が昭和２年（1927）４月28日から開催の天理教講習会に、文学博士姉崎正治、谷本富らと共に講演したことによると思われる。クエーカー教徒としての敬けんなキリスト教徒である新渡戸は、天理教のことを数年前から聞いていた。とくに、教祖が「知者と学者は後回し」と述べたことに対し宗教の特徴を現した名句だと関心を示し、教理は無造作だが天理教信仰による実際生活に及ぼす効果は偉大である、と述べている[14]。

天理教は明治41年に独立を公認され、教化活動を積極的に展開し始め、その一環として著名な学者を招いて講演会を開くようになった。とくに姉崎と谷本は天理教との関係を深めていき[15]、両博士は一時、天理教に買われたとの風評が立ったようである。広池は、新渡戸も天理教に関係を持ちすぎて、天理教との関係を取り沙汰されてはいけないと、進言することを決意したようである。

広池の意を受けた中田は間もなく新渡戸に会ってその意向を伝え、天理教に対しては慎重に行動するよう進言しているものと思われる。昭和３年８月５日付の中田宛広池書簡の追伸書きに、「新渡戸さん、危ない処でした。よく話して下さって、同博士も助かった」とある。この文面から、中田が天理教の内部事情と広池が天理教を退いた事情を打ち明けて、新渡戸も広池の意

を了解したことが伺える。

4．新渡戸の序文完成

さて本題に戻ると、昭和３年８月10日付中田宛書簡で広池は新渡戸方へ立ち寄るよう指示しており、更に14日付書簡では、中田に22日に逗留先の関温泉に来るよう指示し、新渡戸のことについて便りが聞きたいとしたためている。８月25日には弟子の鈴木利三郎に書簡で、新渡戸の序文を清書して軽井沢の新渡戸の別荘に送るよう指示、同28日付中田宛書簡でも序文をすぐに送るよう指示している。

新渡戸はこの送られた序文（案）をもとに自ら序文を書いたようで、昭和３年９月６日に脱稿している。同８日に軽井沢から手紙とともに、長野県の渋温泉に滞在していると聞いた広池に書留で送っている。ところが広池は、湯当たりのために同県の田沢温泉に移り、９日に一担渋温泉に配達された序文は、翌10日に田沢温泉に転送され、11日に中田はその序文をおそらく印刷所に渡すため、携帯して上京している。広池は12日には中田に新渡戸の序文の扱いについて、英文と和訳文と両方並べる事を電報で指示した上、念のためにと、葉書にも同様の事を書いて送っている。またこの葉書によれば、まだ英文の『論文』を出版する計画を進めており、英文版には英文の序文のみ入れるとの意向を示している。さらに広池は20日に中田宛に書簡を送り、その中で英文、和訳１通ずつ清書して原文と共に田沢温泉に持参するようにと述べている。10月に入ると、６日に新渡戸博士の所在を中田に問い合わせている。その後に序文を寄せてくれた白鳥、新渡戸両博士の経歴の紹介文を入れることにしたのであろうか、14日に中田は新渡戸を東京に訪ね、履歴を書いてくれるよう依頼しているらしく、新渡戸はさっそく同日付で履歴と手紙を広池に送っている。その手紙の中に、提案された一字加筆の件[16]を了承し、また、栗を贈呈されたことに対するお礼が述べられている[17]。

広池は11月24日付鈴木宛書簡で序文訳と伝記（履歴のこと）を逗留先の田

沢温泉に持参するよう伝え、翌25日付同氏宛書簡では校正ゲラを見て多少修正したい旨書き、更に12月３日にはやはり同氏宛に『論文』の背文字、ページ等の体裁と新渡戸の伝記(履歴)等をもう一度見たいと書いている。この経緯からも、新渡戸の序文及び履歴の扱いに広池がいかに慎重になっていたか、またそれだけ期待が大きい事がわかるといえよう。

12月15日付執筆の『論文』献本口上書によれば、多忙で通読の時間が取れなければ両（白鳥、新渡戸）博士の序文と自序、緒言と１、２、９、12～15章だけでも通読してほしいと記している。昭和３年12月25日に『論文』初版本が出版されるが、『日記』によればその直前の17日、白鳥、新渡戸両博士を東京会館に招いてモラロジーを全世界に普及することを相談し、意見を聞くかたがた会食している[18]。同月30日の『日記』貼付メモには「400円　白鳥・新渡戸博士へ謝儀」とあり、年を越さないうちに序文のお礼をしたものと思われる。尚、初版本の序文は白鳥、新渡戸の順に配列されている。

『論文』の序文に於いて新渡戸は、広池が最高道徳樹立の目的、その研究方法、特徴及び広池の人格について的確に把握して紹介している。即ち、まず第一に、広池の人格と並外れた業績を評価し、病身でありながら健康な学者を凌ぐ『論文』を完成したことに驚嘆する。しかし「余の特に敬服に堪えないのは……博士が法理学者や、社会学者や、哲学者や、歴史家の種々雑多なる書籍を広く渉猟し、宏大無辺の材料より取捨選択して、それを自家薬籠の裡に収めたる手腕と裁断弁別の力あるとに敬服する。」そして、「種々の方面より人生を観察して、人生の主要なる目的は道徳の完成にあることを教えた」ことに注目している。第二には、人類には倫理学や宗教など色々あるが、道徳心の極致ともいうべき最高道徳に到達すれば、諸理論は融合一致するとした。第三に、帝国主義の進展と世界の混乱に対し、国際連盟で８年間国際平和に尽力してきた新渡戸は、その経験から、世界平和は政治、経済だけから論じても根本的な解決にはならないとして、倫理道徳の観点から人類の平和安寧を実現しようとする広池の態度を高く評価する。第四に、広池は「人生に処する究極の原理を示され、人類の幸福を増進する秘訣を授けられ

た」だけでなく、自らの説くところを「自ら実際に行っておらるる」と、広池が最高道徳を机上の理論にしないで、身をもって実践の学であることを示し、更に学校を興して社会の道徳化を進めようとしていることに敬意を表している。

5．『道徳学科の論文』の紹介

完成された初版本『論文』300部は昭和3年（1928）12月22日から天皇陛下はじめ各宮家、政治家、財界人、官公吏、軍人等に献本している。[19] 同時に大新聞にも書評等で取り上げてもらうべく、広池は大蔵大臣、東京市長、貴族院議員等を歴任していた阪谷芳郎博士に大阪朝日、大阪毎日の両新聞社への紹介状を依頼しているらしく、昭和4年（1929）1月2日付で阪谷より広池に、依頼の村山（大阪朝日新聞社長）、本山（大阪毎日新聞社長）両氏への紹介状2通同封の旨の手紙が届いている。更に広池は、当時国民新聞社長、主筆であった徳富蘇峰にも『論文』を取り上げてもらおうと、新渡戸に紹介を依頼しようとした中田のメモ書きが残っている。[20] 同メモは「新渡戸先生へ」としたもので、徳富の件の他、新渡戸の天理教接近の事に再び触れている。それは、先に述べたように、姉崎、谷本両博士が天理教と関係をもち、新渡戸も昭和2年6月に同本部を訪問したので、広池はその直後に中田をつかわして進言したが、更に昭和3年12月20日発行の『道乃友』38巻24号に掲載された天理教本部役員（天理教校長、敷島大教会長、道友社長）への追悼記事が広池に再度進言の必要性を感じさせたようである。その友人（天理教本部役員、山名大教会長、天理中学校長）の追悼文に、故人との講演旅行の際、酒を飲んで講演した失敗談が出ており、広池はこれを読んで翻然として[21]『道乃友』を新渡戸に見せて両人がどういう人物であるかを知らせるよう中田に指示し、昭和4年1月10日付の中田宛書簡では、新渡戸の帰宅を問い合わせている。

尚、広池は昭和4年1月6日付諸岡長蔵宛書簡に、かねてから天理教の教

導職を返上したいと思っていたが、この追悼記事を読んで、断然返上を決行するとの決意を述べている。そして、広池はその決意を実行すべく1月21日、天理教の教導職と神恵講返納の手続きをし、同月24日に天理教本部から辞職聴許、返納受理の指令が届く。[22] こうして広池は、天理教本部及び同教会との直接的関係を断つ。

一方新聞社への件は、恐らく阪谷氏の紹介状をもって1月21日に中田がまず大阪毎日の佐々木、大阪朝日の藤沢両方氏に面会のため奈良から大阪に向かい、翌22日大毎に『論文』を進呈し、「博士御面会の時日を打合す」。[23] 翌23日、広池は大毎本社を訪れ本山社長に面会してモラロジーの発表について話し合い、同社長の協力の約束を取り付ける。[24] ところが朝日との折衝は進展しなかったようで、1月30日付広池宛の中田書簡によれば、阪谷博士から、朝日の村山はむずかしいが、本山は分かる男であるとの言葉があったという。

その後しばらく記録はとだえるが、昭和4年4月1日付で、新渡戸は東京日日、大阪毎日新聞社の編集顧問に就任する。同氏の顧問就任は、広池が本山社長にモラロジー講演会協力の依頼をした後であり、ここに広池と新渡戸との不思議な縁が伺われる。

大毎主催のモラロジー講演会については4月17日、中田が本山社長と協議してまず4月下旬に開こうとした、と浅野の研究にある。[25] 5月4日付中田宛広池書簡では、追伸に「新渡戸、岡（大毎副社長岡　実）、課長（秘書課長）などよろしく」（括弧内は引用者）とある。その後6月上旬に実行すると決めて、[26] さっそく講演会趣意書と案内状の案が書かれたが、これには本山社長の開会挨拶はあるものの、[27] 新渡戸の紹介講演は計画されていない。しかし、講演会は結局実現せず、広池は『孝道の科学的研究』（以下『孝道』と略す）の著述や小講演を繰り返している。

この間新渡戸は、アメリカの民間人が始めた平和運動団体「太平洋問題調査会」日本支部の理事長に、井上準之助（日銀総裁）のあとを受けて就任した。同会には阪谷が既に大正15年4月に理事に就任している。阪谷は、新渡戸が明治42年1月に実業之日本社の顧問になったとき、新渡戸の顧問就任を

祝う記事を同社発行の雑誌に寄せていることからみて、二人は明治末から関係をもっているとみれよう。

6．大講演会実現へ

昭和4年（1929）8月17日に『孝道』を出版した広池は、『論文』と同様に同書を著名人に献本しようと、新渡戸には8月9日付中田宛書簡で自ら直接持参して意見を聞きたいと書いている。そして9月7日、田沢温泉から軽井沢の新渡戸別荘を訪問したが、留守で会えなかった。[59] 10月8日付中田宛書簡では、岡、徳富、白鳥、新渡戸諸氏に『孝道』を郵送するよう指示している。しかし、白鳥、新渡戸両博士には郵送ではなく直接持参するよう指示を変更している。その後、同書を献本したという記録は見当たらない。広池はまた、東京日日、大阪毎日両新聞社にも『孝道』1300部を贈呈することにしたと、『日記』昭和4年11月10日の項にある。これは、広池が新聞記者にも読んでもらおうとして起こした行動らしい。一方新渡戸は、10月28日から太平洋問題調査会の第3回国際会議に議長として活躍し、広池の『日記』にもそのことが触れられている。[60]

4月に立ち消えになった大毎での講演について、昭和4年11月17日付中田宛広池書簡で別の案が述べられているが、結局これもその後の経緯不明で、昭和6年まで動きは出て来なかった。尚、この間、新渡戸や白鳥の力を借りてモラロジーを欧米で発表したり、モラロジーの研究所を建て、両博士を学術顧問にするなどという広池のメモ書きが残っている。

昭和4年10月24日、ニューヨークの株式市場大暴落に始まる世界恐慌が勃発、同5年（1930）には日本でも米価暴落、銀行のとりつけ騒ぎが起きるなど、国民生活は大混乱した。こうしたなかで広池は、モラロジーを普及して一日も速く日本社会を道徳的に立て直したいと各地で講演をするほか、『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』のレコード吹き込みをしている。その後、昭和5年11月13日に大阪市西成区役所桜上で玉出工業協和会主催によ

り、レコード併用の講演会を開いて大阪開発の端緒を開いた。次いで16、17日にも同会主催の講演会を開いている。

昭和6年（1931）、栃尾又温泉で生死の境を彷徨して回復後、いよいよ国内でモラロジーを本格的に普及しようとした広池は、それに先駆けて京浜幹部養成のため、7月22日から24日まで霧積温泉で第1回のモラロジー講演会を開いた。[61] そして、延期されていた大阪毎日新聞社主催の講演会をいよいよ実現することを決意した広池は、8月8日、中田を軽井沢滞在中の新渡戸に使いにやる。昭和4年の計画では、新渡戸に講演を願う予定はなかったが、その後昭和6年になって新渡戸に前講を依頼したということになる。『日記』によれば、「去る8日、中田氏を軽井沢に差し出し、新渡戸博士殿に大阪講演会の御賛成を乞い、御快諾を得たり」[62]とある。新渡戸はこのとき、予定表を見て9月21日しか空いていないと日程をほぼ決め、また演題も広池の原案をもとに「広池先生の研究の世界的意義」とした。こうして同20日付で広池は本山社長に再度、講演会の依頼状を出している。[63]

拝啓　久々御無沙汰仕り失礼仕候　さて先年御主催を願上　御社講堂に於て最高道徳の講演会開催の儀　御約束仕候へ共　当時は時機未だ熟せざる感有之　小生より一時御延期願上　其儘御きゝ済に相成　今日に及び居候　然るに今日に相成候ては我国民最高道徳実行の必要実に焦眉の急を告げ　大阪の産業界及び経済界に於ける立直しの機運は　誠に昨今を以て尤も緊急を感じ申候

是れ正に右講演会開催の好時期かと存じ　新渡戸先生の御高見をも伺ひ見候処　大に御賛成被下　御出演御快諾の上　別紙の演題をも御選定被下候

就ては明9月下旬頃　右講演会御開催の儀懇願仕度候　之につき本日態々中田中を御膝下に差上げ候間　細目御きき取り被下候上　宜しく右御決定御願申上度候　余は御引見の節　同人口上を以て委曲可申上候　　早々敬具

昭和6年8月20日

千　九　郎

本山大毎社長殿　御座下

広池は更に、大毎にモラロジー研究所名で正式の依頼状を郵送し、期日を9月19日より24日までの間にしてほしいと申し入れた上[33]、交渉のため中田を大阪に派遣している。中田は23日に本山社長に会って講演会の賛成を得、その結果をさっそく電報で報告している[34]。次いで翌24日付で大毎講演課和気律次郎課長から中田宛に書簡が届き、新聞社側としては①日時を9月19、21、22日のうち1日を選びたいので、新渡戸に都合を打ち合わせ中、②会場は中央公会堂は広すぎるので本社大講堂にしたい、の2点を述べている[35]。霧積温泉滞在中の広池宛に、8月26日新渡戸から講演会の日程を21日に決めたと電話があったという電報が中田から届いた[36]。『日記』8月28日の記事によると、会場も大毎大講堂と決定し、さっそく広池は新渡戸、和気両氏に電報を打っている。また更に手紙も出したらしく、和気氏から29日付で返信が来ている。

講演会準備のため霧積から帰京した広池は9月13日、新渡戸を東京の本宅に訪れ、お礼の挨拶をしている[37]。17日に大阪に着いた広池はさっそく本山社長等に挨拶に行っている模様で、土産のメモ書きが残っている。こうして昭和6年9月18日に満州事変が始まり、同21日には朝鮮駐在の日本軍が満州へ出動しているさ中の9月21日、大毎での大講演会となったわけである。

講演会は「広池千九郎博士産業・経済講演会」と題され、約500人が聴講した。大阪毎日新聞社本山彦一社長の挨拶に続いて立った新渡戸は、「広池先生の研究の世界的意義」と題して約20分間講演している[38]。その中で新渡戸は、国際連盟や連盟内に設けられた知的協力委員会（ユネスコの前身）での経験から、世界は思想的に混乱していると述べている。知的協力委員会は哲学者ベルクソン、物理学者キューリー夫人、同アインシュタイン、文学者ギルバート・マレーなど世界最高の学者が集まって、学術交流を通じて世界平和に貢献しようとして作られたもので、新渡戸はその幹事長を務めていた。新渡戸によれば、委員会のメンバーの一致した意見は、今日（当時）、政治、経済、学問、宗教、その他すべての面で混乱しており、諸学問も諸宗教も「どれ一つとして、人間の心を安定させる力がないように見受けられる」というものであった。そして、西洋の思想界がこのように乱れているについて

は、東洋の思想を入れなければ統一は図れない、というのが世界最高頭脳の世界情勢の認識であった、と新渡戸はいう。

こうして、西洋では東方からの光明が来ることを期待している時代に帰国した新渡戸は、間もなく広池の訪問を受けたわけである。そして、2000年の古い歴史をもつ日本社会が西洋に劣らず混乱している情況を目の当たりにした新渡戸は、広池が従来の教訓的な道徳によらずに、西洋の先進学問にもとづき、科学的、理論的に道徳を説明し、最高道徳を唱導してその実践をすすめていることを高く評価した。そして、広池の説が「日本のみならず、海外にもゆき渡って、光は東方より来るという期待に背かないように望む」と説いた。また新渡戸は、広池が単に理論を説く学者でなく、その人格に接して得るところがあり、会うごとに尊敬の念を深めたと、自ら主張する最高道徳を自ら実行しているところに、知行一致を見ている。

7．国際紛争の中で

新渡戸はその後、10月に中国の上海で行なわれる予定の太平洋問題調査会第4回国際会議に日本代表として出席することになっていた。しかし、持病の神経痛が悪化して身動きできないほどだったが、出国のため列車で神戸へ向かった。途中名古屋駅で、京都駅から医師と看護婦を乗り込ませるよう手配し、医師が止めるのも聞かずに大毎講演から約20日後の10月9日、「死んでも構わん」と悲愴な決意をもって松葉杖と看護婦に支えられながら神戸港を出港している。満州事変を起こした日本と中国との関係を何とか取り持とうとしたのであった。その後、広池はモラロジーの普及に専念し、他方新渡戸は、渡米して日本の国際的立場の失墜を防ごうと精力的に活動したため、二人が接触した形跡は資料上見られない。

新渡戸は翌昭和7年（1932）2月、上海事変勃発直後に松山市で「日本を滅ぼすのは共産党と軍閥である」と発言して、軍関係者から1か月にわたって厳しく追及され、入院先の病院から帝国在郷軍人会評議員会に出席し、陳

謝を強要された。この事件に端的に現れているように、新渡戸は日本の軍国主義化に不安感を募らせていた。広池も中国での事件に対し、鈴木侍従長に兵士と国民を引き揚て戦争を中止するよう訴える書簡を3回も送るほど、中国での日本人の行動に深く憂慮していた。国際連盟で8年間活動し、世界情勢に詳しい新渡戸と、国際政治の舞台を直接経験したことがない広池の両者が、ともに上海事変以後の日本の対外関係を大いに憂慮した点は、注目される。

日本の行動は世界的にも非難の的となり、特にアメリカでは対日感情が悪化し、また日本ではアメリカが次々に排日関連法案を成立させることに対して反米感情が高まっていた。新渡戸は日米関係の修復に身を呈そうと昭和7年4月、かつて「アメリカの排日法が撤回されない限り2度とアメリカの土を踏まない」と語り、かつ実行したそのアメリカに渡った。太平洋のかけ橋になることを念願としていた新渡戸は、日米の橋が崩れ落ちるのを何とか回避しようとしたのであった。新渡戸は「何分現今米国に於ける対日思想は、悪化を極め候事なれば、暗夜に飛込む如き心地致候へ共是又報国の一念以外の他意なく[9]」と、心境を親しい尼僧に書き送っている。新渡戸はアメリカで排日派の人々と会ったり、フーバー大統領、ステムソン国務長官と意見交換し、また全米各地で100回以上講演して日米関係の改善を説いて回っている。

昭和8年（1933）3月下旬にアメリカから帰った新渡戸は、3回目の御前講義をした後、カナダ・バンフで開かれる太平洋問題調査会第5回会議に出席のため、8月に出国する。そして会議を終了して間もなくビクトリア市で発病し、10月15日（日本時間16日）客死する。

新渡戸の死去は内外に大々的に報道された。ちょうど翌17日に伝統祭（於東京講堂）が挙行され、式のすぐ後に広池は新渡戸の慰霊祭を執り行なった[10]。広池が自らの手で慰霊祭を行ったのは、新渡戸の時、恩人の一人、矢納幸吉・天理教勢山分教会長の時の2回のみであった[11]ことから考えても、広池が新渡戸に対していかに感謝していたかが伺える。これについて広池は、阪谷に書面を出したようで、新渡戸と交流のあった阪谷は19日付でさっそく広池に礼

状を送っている[12]。

貴翰拝誦。新渡戸博士の逝去は実に痛惜至極に存じ奉り候。就いてモラロジー会において追悼会を開き祭典御執行相成り候趣、旧友に対する御交情の深厚なる、感激の至りに存じ奉り候。

敬具

8年10月19日　　阪谷芳郎

新渡戸の遺骨は11月16日に帰国し、18日に東京・青山葬儀所で葬儀が行なわれた。この時広池はちょうど名古屋で講習会を開いていたため、霊前に供物を供えるよう弟子の沢畑英貫に命じ、かつ18日の葬儀に出席するよう指示し、同氏は広池の代理として参列している。これで広池と新渡戸との交流は終わることになった。

注

(1) 新渡戸稲造「広池先生の研究の 世界的意義」『社会教育資料』44号、広池学園出版部、p.2、昭和40年11月10日。

(2) 中田中『必要なときに必要なものが』広池学園出版部、pp.126～7.

(3) 中田中氏の娘婿でモラロジー研究所の栗原英二研究員の御教示による。

(4) 『広池千九郎日記』（以後『日記』と略す）広池学園出版部、昭和2年6月30日の項参照。

(5) 中田、前掲書、p.127.

(6) 中田、前掲書、p.39、p.127.

(7) 要旨―風俗習慣が各国で互いに似てきているように、今日では道徳も各国に等しく認められる標準に達しつつある。しかし、標準を定めるだけでは不十分で、その応用の心がけを正しくしなければならないが、それは英国の哲学者バートランド・ラッセルのいう親切心の涵養が第一である。

(8) 松浦香『光は東方より』広池学園出版部、p.9.

(9) 奥谷文智編述『広池博士実伝資料』昭和21年、広池博士記念文庫蔵による

(10) 松浦、前掲書、p.9.

(11) 『日記』、昭和2年6月30日の項参照。

(12) 要旨―長く外国生活をしていたある学識豊かな友人が、天理教信者であることを知った。そして、その教理は無造作だが、信仰の効果は偉大であると思われて関心を示すようになった。同教の本部を訪れて、心一つを修養することを第一義にしていることに感心した。クリスチャンである自分は天理教の神には共鳴できないが、信仰心が薄れつつある現代に、天理教はこの欠点を幾分か補うものであろう。

(13) 広池千九郎『道徳科学の論文』、広池学園出版部、5冊目、pp.1647～52.

(14) 新渡戸稲造「天理教本部を視たる所感」『実業之日本』昭和3年7月15日号。

(15) 姉崎博士とは姉崎正治（明治6―昭和24年）のことで、東京帝国大学教授として宗教学、とくに仏教学の権威であり、日本宗教学会の初代会長を勤めている。姉崎は天理教2代管長中山正善の東京帝国大での指導教官であった関係で、天理教との関係を深めたものと思われる。昭和2年4月の天理教講習会で「人生における宗教の位置」と題して講演している。その後も管長と関係をもち、第2次大戦後、熱海の中山の別荘で病死している。谷本博士（慶応3年―昭和21年）は教育学者で京都帝国大学教授、竜谷大学・真宗大学講師をしていた。大正2年、同帝大総長として学内改革を始めた沢柳政太郎に、乃木大将の殉死を攻撃して物議をかもしていた谷本は他の6教授とともに退職を命じられた。その直後に天理教大神殿の落成式があり、谷本は出席している。次いで同15年に天理外国語学校落成式に出席、昭和2年の天理教講習会に出席のため3回目の訪問をしている。谷本はその後も天理教校生や別科生に対して講演している。更に、二人は中山管長の結婚に対し、祝いの言葉を天理教の機関雑誌『道乃友』に寄稿している。

(16) 中田、前掲書、p.130に序文の修正申し込みの話が出ている。

(17) その時の模様は同上書に、群馬県の栗を持参したが、栗の炊きかたまで説明して喜ばれたと描かれている。また、川魚のいわなを生きたままバケツに入れて手につるし、馬に乗って新鹿沢温泉から山道を経て軽井沢に持参したエピソードも紹介されている。栗原研究員によると、途中何度も水を入れかえて運んだようで、この例からも、広池の新渡戸に対する期待の大きさと、恩人に対する感謝の表現の徹底ぶりが伺える。pp.44～5.

(18) 『日記』、昭和3年12月17日の項参照。

(19) モラロジー研究所編『資料が語る広池千九郎先生の歩み』（改定版）広池学園

出版部、pp.342～3参照。

(20) 『日記』によれば、広池は昭和4年6月24日 岡実・大阪毎日、東京日日新聞社副社長と徳富に面会している。この時徳富は大毎、東日の社賓となっていることから、新渡戸の紹介による面会ではないと思われる。

(21) 広池は近々、宗教学会等を通じて面識のある姉崎博士に天理教の内情を伝えて進言しようとしたらしい。しかし、（注15）のように姉崎は天理教との関係をもちつづけた。姉崎と天理教との関係からか、広池は『論文』初版本には姉崎の著書『根本仏教』10箇所、『現身仏と法身仏』2箇所、及びヘースティングズ編『宗教倫理百科全書』のうち姉崎執筆の「真言仏教」の項を引用していたが、再版本ではすべて他の文献に取り替えた。『日記』昭和6年8月11日の項参照。

(22) 『日記』、昭和4年1月21日、24日の項参照。

(23) 『日記』、昭和4年1月22日の項。

(24) 『日記』、昭和4年1月23日の項参照。

(25) 浅野栄一郎『広池博士の資料研究―主として京都時代』、広池学園出版部、p.226.

(26) 『日記』昭和4年4月17日の項参照。

(27) 延期申し込みの連絡をどのようにしたかは不明。

(28) 『日記』、昭和4年9月7日の項。

(29) 『日記』、昭和4年10月28日の項参照。

(30) 『日記』、昭和6年7月22日の項参照。

(31) 『日記』、昭和6年8月12日の項。

(32) 浅野、前掲書、pp.241～2.

(33) 同上書、pp.242～4.

(34) 『日記』、昭和6年8月23日の項。

(35) 浅野、前掲書、pp.244～5.

(36) 同上書、p.245.

(37) 『日記』、昭和6年9月13日の項参照。

(38) 新渡戸稲造、前掲論文参照。

(39) 松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房、p.248.

(40) 『日記』、昭和8年10月20日の項参照。

(41) 栗原英二研究員の御教示による。

(42) 『日記』、昭和8年10月20日の項。

The Relation between Dr. Hiroike and Dr. Nitobe

Keiji Suwanai

Dr. Inazō Nitobe, ex-Under-Secretary General of the League of Nations, was one of the most important benefactors in spreading the thought of Moralogy for Dr. Chikurō Hiroike, who embarked upon the propagation of Moralogy after having published A Treatise on Moral Science in 1928. Dr. Hiroike wrote the book in order to bring about the salvation of confused human society. He felt obligated to Dr. Nitobe because: (1) Dr. Nitobe appreciated and recommended that book from the viewpoint of human history, having contributed the preface to the book, which Dr. Hiroike wrote in the hope of the realization of happiness for all human beings; (2) Dr. Nitobe extended great help in expanding Moralogy by introducing Dr. Hiroike as "one of the lights from the East" in the lecture meeting which was held in 1931 at the hall of Ohsaka-Mainichi Newspaper Company. Dr. Hiroike planned the meeting as the first step toward social education designed to popularize Moralogy among the Japanese people.

There remains some indication that Dr. Hiroike tried to look to Dr. Nitobe for guidance because of the latter's profound learning and keen international sense. Those two great figures, however, did not have any contact after those two events, since Dr. Nitobe continued to act widely as a cosmopolitan and Dr. Hiroike also was busy in developing the social education system of Moralogy.

In this paper, the author tries to inquire into the relation between both figures as far as possible based on the available data.